

安心

介護技術認定 普及に課題

介護職の実践的なレベルを全国共通の基準で認定する国の「介護プロフェッショナルキャリア段位制度」が、少しずつ広がっている。職員の実力を明確にして、キャリアアップや待遇改善につなげようとする事業者がある一方、全国の認定者数は国の目標を下回っており、課題も残る。

(小林直貴、写真も)

「職員が自分の実力を把握し、自分に足りない技能を意識するようになった。職場全体の介護スキルの底上げにもつながっている」

キャリア段位制度の創設直後から積極的に取り組む岩手県一関市の特別養護老人ホーム「福光園」の菅原基吾園長(55)は、職員の変化に手応えを感じている。

同制度は、介護技術や指導能力に関して「段位」にあたる「レベル」を認定し、

■基本動作確認

技量を客観的に示せるようにするのが目的だ。職場の上司などが評価者となり、職員が高齢者を介助する技術やコミュニケーション能力を見て評価する。その結果を基に、国が認定する。

評価者は、「体をゆつくりと回転させ、車いすに深く座らせることができたか」「スタッフの体調を把握するために声かけや観察を行っているかなど、最大148のチェック項目」をどこに「できているかどうか」を確認する。レベルは7段階。現在は基礎知識がある「レベル1」から、職場でリーダーシップが取れる「4」まで設定されている。将来的には、最上位の

「段位制度」

職員底上げ効果 評価作業は負担



「7」まで作られる予定だ。福光園の菅原園長は、いち早く講習を受講し、評価者になった。「チェック項目の基準が分かりやすく、新人教育にも活用している。」

入居者に笑顔で声をかけながら食事の介助をする阿部さん(岩手県一関市の「福光園」)

将来は人事評価にも反映させ、職員のキャリアアップにつなげたいと意欲的だ。

介護福祉士の阿部智佳子さん(50)は勤務11年目。菅原園長の評価を受け、「レベル4」に認定された。同僚の評価も行っている。「介護福祉士などの資格の有無にかかわらず、実際に現場で基本動作ができていたか確認できる。利用者にとっても安心感が増すと思う」と話す。

同制度を活用する事業者は、介護保険で受け取る報酬が増えることもある。職員の処遇改善のための加算を受ける際の要件の一つとなっているためだ。

東京都は15年度から独自に、レベル認定者に対し、勤務先を通じて月平均2万円程度を支給する方針だ。

介護分野では、東日本大震災の復興支援の観点から、人手不足が深刻な岩手、宮城、福島県で、評価者を養成する講習が先行実施され、13年度から全国に拡大した。

これまでに7817人の評価者が誕生したが、レベル認定者は265人にとどまる。現在、6000人以上の評価者が進行中だが、当初目標とした「制度創設後3年間で認定者2万人」を下回っている。

認定者数が伸び悩む背景には、評価に1年近くかかることもあるなど、現場の負担の大きさが指摘されている。東北地方の別の特養の施設長(58)は「人手不足で時間をかけられない。認知症の専門研修を受けるなど、ほかに優先すべきことがある」と語る。

熱心に取り組む福光園も、認定済みの職員は3人、評価中や認定待ちも2人ととどまる。忙しい職員が勤務時間の異なる別の職員を評価するのは難しく、時間外や休日作業を進めざるを得ないケースもあるからだ。菅原園長は「全国で制度を定着させるには、評価手続きを簡略化するなど、改善が必要ではないか」と指摘している。

◎キャリア段位制度の「チェック項目」の例

	チェック項目
入浴介助	浴槽に入る時、手すりや浴槽の縁をつかんでもらい、バランスを崩さないよう身体を支えたか
食事介助	のみ込むことができる食べ物形態が確認したか あごが引けている状態で食事が取れるようにしたか
排せつ介助	スポン、下着を下ろす了承を得て、支えながら下ろしたか 排せつ後、利用者の体調確認を行ったか
移乗・移動・体位変換	ベッドの高さを調整し、利用者の足底がついた状態で介助を行ったか
利用者・家族とのコミュニケーション	家族に利用者の日頃の様子などを積極的に伝えることができたか

■評価に1年

キャリア段位制度は、民主党政権時代に成長戦略の一つとして導入。介護以外に、環境や食の分野でも設けられている。需要が伸びる成長分野に人材を呼

榊美智子・介護保険課長は「リーダーの育成につなげてほしい」と期待する。